

読み進めていくと……これは、あの化け物や仔山羊と名乗っている少女を招来しようと企んでいた人物のものであるらしい事が分かった。

曰く、元々は世の中を嫌い、家に引き籠もっていた資産家の子供であつた事。両親が事故で亡くなり、遺産を受け継いだ事。

だがそれで、生活が変わる事もなく、ただ引き籠もり続けていたらしい事。

その殆どは世間に対し、批判的な言葉で散りばめた悪意や、明確な相手を持たない漠然とした恨み事のようなもので埋め尽くされていた。

だが、ある日……N(エヌ)と名乗る人物から送られてきた、一通のメールを受け取った所から、その内容は徐々に異質さを増していった。

メールには、とある污水处理施設の地下に不定形の化け物が隠れ潜んでいるという話や、その化け物を従える方法や呪文などといった怪しげな内容が記載されていたようであつた。

手記の男は受け取った当初こそ、悪戯メールと思っていたようだが……時間だけはあつたためか、暇潰しとばかりにメールの内容を確かめに行ったようだ。

そして、驚くべき事にその化け物……シヨゴスは実在し、怪しげであつた呪文は効果を表し、彼はそれを従える事に成功してしまつたらしい。

そこから先の内容は、加速度的におどましさの一途を辿つていった。

シヨゴスの餌へと生きた小動物を与えていき、その度にシヨゴスは少しずつ大きくなり、知性を得ている様子であつた事。

次第に与える動物は大きくなり、やがて……生きた人間を与えたならばどれだけ賢くなるのかに興味が惹かれていった事。

そして遺産として受け取った、かつて祖父が所有していたという山奥の洋館に住居を移し……そこでシヨゴスの餌となる人間を誘い込むべく、奇妙な廃屋の噂を流し始めた事。

その結果、噂を聞いてやつてきた物好きな人間が……何人も犠牲となり、動物を与えていた時よりもより顕著にシヨゴスは成長し知性を得ていく事に狂喜していった事。

やがて彼はその成長を続ける化け物だけに飽き足らず、他にも似たような存在がいるのではないかと書物や文献を掻き集め始めたらしい。

そして、“千匹の仔を孕みし森の黒山羊”と呼ばれる異質の神に供物を伴う儀式を行う事で、黒い仔山羊という従者を授けられる事を突き止めたようだ。

彼はシヨゴスへの犠牲者を増やしながらも儀式のための準備を進め、こう記していた。

——神への嘆願の準備はもうまもなく終わる。これで自分は愚かな人間には扱えぬ存在を〆匹を従える、偉大な人間だと証明出来るのだ！

ただ文献からでは実際に黒い仔山羊なるモノがどの程度の存在かは明確には分からなかった。

……育て上げたシヨゴスと戦わせてみるのも一興(いっきよう)か。

——もし、シヨゴスが弱いようならば黒い仔山羊の方を従え、逆ならばシヨゴスに黒い仔山羊を食わせてしまうというのでもいいかもしれない。

同格の存在ならば、どちらも従えればより自分の優秀さを示すことが出来る！

招来さえしてしまえば所詮は化け物とはいえケダモノみたいな連中だ、何だかんだと馴けてしま

えば自分に従うだろう。

——一つだけ気になる点を無理に上げるとすれば、人を取り込み始めてからシヨゴスは賢くなつたが、少々賢くなり過ぎている所があるように感じなくもない点か。

時折、命令に従わぬような姿勢が感じられるので、その点は非常に不愉快な事だ。

念のため、火を嫌うシヨゴスへの仕置きとしてガソリンなども用意しておくのは、悪くないかもしれない。

幸い、この部屋にはシヨゴス除けの結界もある。知恵を得ているとはいえ、呪文も知らぬケダモノ風情には入り込む事は出来ないだろう！

ガソリンはタンクに詰め、ライターと共にいつでも使えるように蟻の準備だけはしておくとしよう。

……そのような彼の感想のような言葉で、手記は終わっていた。

読み終えた貴方は、狂人の戯言(ざれごと)としか思えぬこの文章を、馬鹿げたものと笑い飛ばそうと思った……思いたかった。

だが……シヨゴスという存在を実際に見てしまっているだけに全て真実の事なのだと理解させられ、そのおぞましさに背筋を伝う強烈な寒気と、吐き気を催す不快感が胸に迫るのを感じずにはいられなかった。